反正天皇、
履中帝の同母弟にして、
淡路宮に生る。
生れて駢歯なり。
瑞井を汲みて浴に具ふ。
時に多遲花、井中に飄落す。
因て天皇を名けて
多遲比瑞歯別皇子と曰ふ。
仁徳帝、
乃ち多治部を諸國に置きて、
湯沐の邑となす。
多遲は今の虎杖なり。
長ずるに及びて、
容姿美しく、身長九尺二寸五分。
初め履中帝の太子たるや、
住吉仲皇子の亂を避けて、
石上振神宮に駐る。

天皇、之を聞き、
迹ねて造る。
履中帝、
意に疑ひて見ず。
天皇、
人をして奏せしめて曰く、
僕、黒心なし。
唯太子の在らざるを
憂れふるが故に
來り赴きしのみと。
履中帝、告げしめて曰く、
我、仲皇子の難を避け、
以て此に至れり。
豈に汝を疑はざるを得ん。
汝、誠に黒心なくば、
難波に還りて
仲皇子を殺せと。

天皇、敬して曰く、
太子、
何の憂ふることか
之あらん。
今仲皇子無道にして、
群臣百姓、
共に之を怨悪し、
左右皆離心あり、
之が為に謀る者なし。
臣、
其の逆を知ると雖も、
未だ太子の命を
受けざるを以て、
徒に自ら慷慨するのみ。
今巳に命を奉ぜり。
何ぞ之を
誅することを難からん。

唯恐らくは、
事平ぐの後、
猶且つ疑はれんことを。
願はくは、
忠直の者一人を得て
興に俱にせんと。
帝、
平群木兎宿禰を
遣はして往かしむ。
天皇、歎じて曰く、
今太子も仲皇子も、
皆我が兄なり。
誰にか従ひ
誰にか乖かん。
然れども無道を除き
有道に就かば、
其誰か我を非なりとせんと。

乃ち難波に至り、
仲皇子の近習
刺領巾を誘ひて曰く、
我が爲に皇子を殺せ。
我必ず厚く
汝に報いんと。
乃ち錦衣褌を脱して
之に興ふ。
刺領布、
遂に仲皇子を刺して
之を殺す。
天皇、木兎の言を用いて、
刺領布を誅し。
即日、
倭に赴き、
夜半、
石上に至りて復命す。

履中帝、
召し見て、
之を褒寵し、
村合屯倉を賜ふ。
履中帝即位の明年、
立ちて皇太子となる。
六年三月、
履中帝崩ず。
十月四日壬子、
履中天皇を葬る。
元年丙午、
春正月二日戊寅、
天皇、位に即く。
是を瑞歯別天皇となす。
秋八月六日己酉、
津野媛を立てゝ
皇夫人となす。

冬十月、
都を河内の丹比に遷す。
是を柴籬宮と謂ふ。
五年庚戌、
春正月二十三日丙午。
天皇、
正寢に崩ず。
百舌鳥耳原陵に葬る。
在位の間、
風雨時に順ひ、
五穀成熟し、
人民富饒にして
海内無事なりき。
追諡して反正天皇と云ふ。